

"mono" to "koto"

Autor(en): **Susumu, Nakanishi**

Objektyp: **Article**

Zeitschrift: **Asiatische Studien : Zeitschrift der Schweizerischen
Asiengesellschaft = Études asiatiques : revue de la Société
Suisse-Asie**

Band (Jahr): **48 (1994)**

Heft 1: **Referate des 9. deutschsprachigen Japanologentages in Zürich
(22. - 24. September 1993)**

PDF erstellt am: **12.07.2024**

Persistenter Link: <https://doi.org/10.5169/seals-147054>

Nutzungsbedingungen

Die ETH-Bibliothek ist Anbieterin der digitalisierten Zeitschriften. Sie besitzt keine Urheberrechte an den Inhalten der Zeitschriften. Die Rechte liegen in der Regel bei den Herausgebern. Die auf der Plattform e-periodica veröffentlichten Dokumente stehen für nicht-kommerzielle Zwecke in Lehre und Forschung sowie für die private Nutzung frei zur Verfügung. Einzelne Dateien oder Ausdrucke aus diesem Angebot können zusammen mit diesen Nutzungsbedingungen und den korrekten Herkunftsbezeichnungen weitergegeben werden. Das Veröffentlichen von Bildern in Print- und Online-Publikationen ist nur mit vorheriger Genehmigung der Rechteinhaber erlaubt. Die systematische Speicherung von Teilen des elektronischen Angebots auf anderen Servern bedarf ebenfalls des schriftlichen Einverständnisses der Rechteinhaber.

Haftungsausschluss

Alle Angaben erfolgen ohne Gewähr für Vollständigkeit oder Richtigkeit. Es wird keine Haftung übernommen für Schäden durch die Verwendung von Informationen aus diesem Online-Angebot oder durch das Fehlen von Informationen. Dies gilt auch für Inhalte Dritter, die über dieses Angebot zugänglich sind.

「もの」と「こと」

中西 進

国際日本文化研究センター教授

1 問題の所在

日本語の「もの」は物体を意味するが、同時に靈魂も意味する。これはギリシャ語の *psyche* が生命を意味すると同時に靈魂を意味するのとよく似ているが、生命と物体とのちがいも、無視できない。日本語は靈魂をより一般的に広く考えたということが出来るだろうか。

するとすぐに、アニミズムということばが思い浮かんでくる。しかし、この「もの」という単語を、すぐにアニミズムに結びつけてよいのであろうか。

おそらく「もの」は存在するだけでは、アニミスティックな働きを持たないであろう。「もの」はことばによって作動してくると考えるべきではないか。たとえば呪文によって扉が開くように。

それではことばとは一体何か。日本語にはことばのほかに「こと」という単語がある。

この「こと」は言語を意味するが、同時に日本人は事も「こと」とよぶ。そこに、いわゆる言霊信仰が生まれると考えるのがふつうだが、しかし言霊信仰とは、はたしてそれほど安易なものなのであろうか。何か言えばたちどころに事が成立する、といったように。物がたちまちに動いて事実を作り出す、といったように。

そこでわれわれは、もう一度「もの」と「こと」との関係を考え直して、日本人の思考およびその表現の仕方を検討してみる必要がある。

2-1) ものA

まず「もの」という単語をくわしく考えてみると、「もの」は第一に、

もの見、もの悲しい

といったように、何か (some one) を意味する。「もの見」は物見遊山、もの見高いといったように、何ごとによらず見ることを示す。特定しない場合に「もの」というのである

第二に、

ものす

といえば、いわゆる代動詞で英語の *do* にひとしい。これまた不特定の、歩くとか食るとかといわないで全体をさす場合に「もの」が

用いられることを示すであろう。

第三に、

もののけ、もののべ

といった「もの」がある。「もののけ」は正体の知れない霊的なものの気配であり、「もののべ」という一族は靈魂を祭ることを職業としたから、この「もの」はやはり靈魂をさすであろう。しかしそれは正体をはっきりと見せないところに靈魂の正体があるから、この Spiritual な「もの」も、漠然とした何かである点、以上のものと矛盾しない。

こうなると物体自身が日本人にとっては、これとして特有の名称によって指定されることのない、全体として存在するものにすぎないことがわかる。石とか木とか、雨とか雪とかといえ、それぞれが全体の「もの」集団から離れて、個別の「もの」になるが、あくまでも「もの」とよばれる間は、没我的に全体の一部としてあるにすぎないことになろう。だからこそ「もの」は何かであり、一方天地自然も「もの」といったのである。

2-2) ものB

以上のような「もの」をものAとよんでおこう。そうすると、ものAを個別化するところに言語がはたらくことになる。

いし (石) き (木) あめ (雨)

のようにいうと、「もの」は「何」の段階から一步進んで、個別化し、そのことによって物体として存在することになる。この個別化された「もの」をものBとよんでおこう。

ところで、このものBを作る言語は、日本語では「ことば」とよぶべき言語だと考えられる。

「ことば」は文字どおり「こと・の・は」で「は」とは端(はし)、片(piece)だから「こと」の断片が「ことば」である。

「ことば」は10世紀になると言語を葉にたとえたもの(言葉)と理解されたが、葉を片と考えたことは事実だが、本来的に言語の葉と考えたのではない。あくまでも原義的には言語の断片、言語以前の片が「ことば」であった。

そこでもものAは「ことば」によってものBとはなるが、まだ「こと」によって指示されていない。つまり、「いし」「き」という単語は「こと」以前にある。

従来、「こと」と「ことば」とは、区別を厳密にされることなく、見られていたのではないだろうか。「は」がついているだけの区別を、明確にしなければならない。

とすると、「ことば」は「こと」の断片だと考えるのが、一番素朴な考え方である。

そこで、いわゆる単語が「ことば」だとすると、「こと」とは

何であるか。平安時代には和歌のことを「こと」といった。そのことを顧みると、「こと」とは叙述のことをいうと理解される。

「いし」とか「き」とかというだけでは叙述がないが、「いし・が・おもい」「き・を・きる」というと「こと」が成立すると考えるべきであろう。

和歌は、そうした心の叙述である。心の叙述がなくては、和歌は「こと」として成り立たない。

そこに、先にあげた言霊信仰を思い出してみると、まさに「こと」において力は発揮され得るし、この言語の力を聞き手は無視できないだろう。「いし」といわれただけでは平気だった者も「いし・が・おもい」といわれることによって、「いし」の存在感を実感することができ、この影響の外にすることができない。言霊がたしかに発せられたのである。

いま問題とする「もの」と「こと」は、このような関係をもつと考えられる。つまり「こと」は「もの」を空漠の中から拾い出し、実質を与える叙述のことであった。日本人にとって大事なものは「こと」であって「ことば」ではなかった。だから「ことば」という「こと」と「は」の熟合は時代が遅れる。

「もの」も、「こと」なくしては「もの」とはならなかった。

3 枕詞

このような「こと」つまり叙述は、どのように形成されたのだろうか。私はこの叙述の原型がいわゆる枕詞にあると考える。枕詞とは「万葉集」以来和歌に用いられた表現形式で、「古今集」などでは一定の組合せをもって二つのことばが結合されるものである。たとえば、

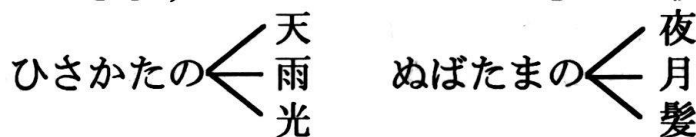
あしひきの山、ひさかたの天、ぬばたまの夜
 といったぐあいに、いつも山や天、夜はきまった修飾のことばをもってよばれる。

そこで、これらのことばがあたかも枕として頭をのせているようだというので「枕詞」とよばれるようになった。

しかし、この表現形式をずっとさかのぼると、けして形骸化したものではない。「古事記」「日本書紀」に載せられる歌謡はもちろん「万葉集」の和歌においても枕詞は生き生きと働き、「枕詞」などと呼ぶことが誤りであることを教えてくれる。そこで私は「枕詞」といわず、「連合詞」と称してきた。以下に私は「連合詞」とよぶことにしたい。

さて、連合詞とはいかなるものか。私が連合詞とよぶことの理由も以下の説明によって明らかになるであろう。

上にあげた「ひさかたの」という連合詞は記紀万葉においては「天」にかぎらず、また「ぬばたまの」は「夜」にかぎらず、



のようにつながる。「ひさかた」とその次のものと、二つのことばの結合は比較的自由であった。もちろん何にでもつづくというのではない。一定のわくがある。

そこでこの場合の連合詞と次のことばとの関係を考えると、無機質で中立的な天、雨、光といったことばに連合詞を与えることによって、一つの意味概念が与えられる。つまり、そこに叙述が成立する。

この関係を、二つのことばが統合され、それぞれの記号であったことばが統合によって意味のひろがりをもつに到る、ということができよう。叙述が成立したからである。すでに枕詞が「こと」の原型だといったとおりである。

ところでまた、連合詞は「ひさかたの天」「ひさかたの雨」「ひさかたの光」という統合をそれぞれ作ると同時に、それぞれの場合に天雨光が排他的に一つを選択しつつ、天は雨、光を、雨は天、光を、また光は天、雨を無意識の中で絶縁しがたく、さまざまな連想をもちながら統合を作っているはずである。

三つのものは一定のわくがあるといったように、お互いに関連し合いながら、一つのグループをなす。そのグループをこえて統合することはない。

およそ連合詞とは、このような叙述形式をなす。

ここで、われわれはスイスの言語学者F. ソシュールの言語論を思い出さざるをえないだろう。その学説は衝撃的な力をもって後々の学界を風靡した。それはソシュールの着眼がたんに言語の説明にとどまらず、多くの物事の構造を指摘したからである。言語学、文化人類学、社会学などなど、その影響をうけた分野は多い。

さて、それほどに根幹的なソシュール学説だから、いくつかの修正もうけた。そこでいまR. バルトの『零度のエクリチュール』のことばによってソシュールの考えをいうと、彼は表現が「人間の精神活動の二つの形態に対応する」といい、その「第一の面は統合 (syntagme) の面で」あり、「統合とは記号の統合であって、これを支えとして拡がりを持っている」という。

また第二の面は「連合 (association) の面で」あり、「何らか共通のものをもった単位が記憶の中で連合し合い、さまざまの関係で内部が支配されるグループを作っている」という。

R. バルトはこうソシュールを紹介した上で、今は「連合」は範列 (paradigm) とか体系 (system) とかよばれるようになった、

という。

そこでソシユールと連合詞を並べてみると、ソシユールはまるで連合詞にもとづいて言語を考えたようにさえ思えるではないか。

ソシユールは連合について、類似の意味をもつほかの語と結びつくという。上の天と光はそれである。また、音の類似によってまったく別の語と結びつくという。上の天（アメ）と雨（アメ）はそれである。

ソシユールはまた、統合と連合が密接な関係にあるという。連合詞も何につづいてもよいのではない。いうまでもないことだが、二つのことばに一定のわくを与える働きが、統合と連合の関係である。統合力が連合力を規制するといいかえてもよいだろう。

私が「枕詞」を「連合詞」とよぶべきだという理由はここにある。私がそれを「連合表現」ということばで提案したのは1976年であったが、これに対する反論は目下ない。管見に入ったものでは「枕詞」を「連合表現」といいかえてみても、何の意味もない、というだけのものが一つあった。

もう一つは一行で私の説を紹介した後、しかし中西の実際の注釈においては連合詞の考えが見られない、というものがあつた。これもこれだけで、論理的な反論ではない。

じつは私は、私の着想をソシユールから得たのではなかった。だからソシユールの名はまったく私の論文には登場しない。しかしソシユールとつき合わせてみても、私の考えは納得がいくものだと、いま言うのである。

したがって、私は連合詞の働きとして、もっと別の面があることも、主張した。

その一つは象徴である。天という存在は観念的だから具体的な姿をすぐに把握することはむづかしい。夜といってもそうである。これらは、具体的なたとえば犬とか猫とかとは違う。ところが連合詞は具体的である。ヌバタマというのはまっ黒な実をつける植物で、その実の姿は誰でも目で見ることができる。「ひさかた」とは長い時間をかけて到達する彼方という意味である。これまた、誰でも実感することができる。

そこで連合の表現になると、抽象的な天や夜が具体的な「ひさかた」や植物のヌバタマと統合されるから、そこには象徴的な表現の作用が起こる。むしろわかりにくい夜をヌバタマの実に代替して認識することになり、天も長い時間の帯の上で了解することとなる。

これを象徴といえ、連合詞は象徴の働きをもつもので、おそらくこうした働きが、もっとも原型的な叙述の一つだったと思われる。

もう一つ例をあげると、「あしひきの山」も同じで、「あしひ

き」とは山の裾野のことである。裾野とか麓また山口と称した場所は古代人によってもっとも尊重されたところである。山口の神は日本の各地に祭られている。この聖地という具体的な場所をもって、山を尊びあがめて捉えたのが、「あしひきの山」という表現であった。

私は枕詞について上のような捉え方を示し、これを連合の表現とよぶべきだと主張した。要は次のことばを「こと」たらしめる叙述がここにあることを主張したいのである。だからもう一つ、枕詞が神話の最少の単位だといったのも、同じ内容である。

たとえば「そらみつ大和（やまと）」という表現がある。都合のいいことに、これには神話が残されていて、ある神様が空を飛びながら大和を見たから「そらみつ大和」といったとある。空から見た大和という意味である。

「見る」ということばは、古代にあってはそのままほめることであったから、神が空から祝福を与えた国である大和とは、大変なほめことばであった。

この例はもっともわかりやすい例であろうが、枕詞は、同じように神の行動を述べたと思われるものがあり、これこそもっとも尊ぶべき表現だったし、そのために長く保存してきた古い古い表現だったにちがいない。

そのことは枕詞がきわめて発生的な、根源的な表現形式で、それこそ、原初的な叙述であった証拠と考えることができるであろう。

逆にいえば、日本人が枕詞とよばれるものを古い表現形式としてもつことが、「こと」こそが叙述だという主張をサポートしてくれると思われるのである。

4-1) ことばのアマルガム

ところで、単語が必ずしも「ことのは」でない場合もある。いささか矛盾するようないい方だから説明が必要であろう。

あくまでも「ことのは」は叙述以前である。そして単語が「ことのは」である場合がほとんどなのだが、その中であって、ごく少数の単語が、単語自体の中に叙述をもつ、つまり「こと」なのである。

この事実を矛盾ではないと私は考える。もっとも濃縮された叙述は二つの単語を必要とせず、一つの単語の内部において行なわれるのだと考えられる。

そしてこの叙述は上のソシユールのいう統合ということばでよんだ方がよいだろう。枕詞にみられたような統合を一つの単語の中にもつ。だから枕詞と同じ構造をもつ単語といってよいであろう。

その例として次のような単語がある。

岩根 屋根 垣根 草根 島根

これらは岩や屋などに「ね」という部分がついたものである。「ね」は植物の根や山を意味する。木の根、富士の高嶺のごとくである。木の根と山が同じことばで表現されることが大事で、日本語の特性として、語の指示するものは物体ではない場合がある。働きを指示するから、働きのひとしいものは物体が別であっても同じ語でよぶ。この場合は「ね」が堅牢なもの、不動なものをさすから、木の根も山も「ね」となる。

といっても岩、屋は明らかに物体である。そこで上記の岩根、屋根などはまず岩、屋と個別の物体をよび、ついで働きを意味する「ね」をそのまま接続させたものだということになる。

この働きとは、表現者が判断したものだから多分に情念的主観的であり、万人に共感されることなくしては、日本語として成立しない。上記のものは判断が客観性をもっていたために単語として成立したものである。

ちなみに、したがって岩根は「不動なるものとしての岩」という意味であり、屋根も「ちょっとやそっとでは壊れない建物」という意味で、これが roof をもっぱらさすのは、そもそも人間の住居とは雨露をしのぐ roof が中心だったことによる（トルコのアンカラでは住居の不法建築に対して、屋根ができていない間は撤去を命じられるが、屋根ができてしまえば撤去を命じることができないという）。

島根も島に根がはえているのではなく、不動なる島の意味、草根も丈夫な草のことで、草の根ではない。

さて、このような単語のでき上がりを見ると物体指示と性格判断を一つにして単語を作るという方法が見てとれる。そこで、このような方法こそ、一つのもっとも短かい叙述といつてよいであろう。上に「ことのは」を片（ピース）として「こと」と区別したが、その「ことのは」の中でも、このように「こと」を作る作業をもつものがあつたのである。

「もの」との関係でいえば、「もの」を「こと」とする「ことのは」として、上述のような「ね」を含むものがあつた。

ソシュールふうにいうと、統合を「ことのは」の中で行なうものであつた。

私はこのような「ことのは」を、「ことばのアマルガム」とよぶ。本来異質な二つの要素が一つの「ことのは」の中に行なわれるからである。

このアマルガムは他にもある。岩についていえば「いはほ」（巖）ということばがあり、「ほ」は秀（ひい）でたものをいうから、高く聳えた岩を日本人は同じアマルガム手法によって「いは（岩）ほ（秀）」とよんだのである。現代人はこんな成り立ちを知

らずに巨岩が「いわお」だと思っているが。

今はなくなったが古代語には「垣ほ」もあった。高く聳える垣のことである。

また、物体指示と性格判断との間に「の」という接続の助詞を入れる場合もある。

玉の緒 息の緒 伴の緒

らがそれである。緒とは長いものをいうことばである。そこで上と同じように玉、息、伴を長いものと判断してこのようなことばを作った。玉とは魂、魂は永続するという判断の上で玉の緒といった。息も呼吸、呼吸は生命だから永遠のものとして生命を考えて息の緒といった。伴の緒も、伴は天皇に従う臣下のことで、それを永遠の奉仕者として伴の緒といったのである。

これらは「の」を介する点で「ね」や「ほ」と相違する。そこで「ことのは」における統合性はやや緩く、二つの「ことのは」においてアマルガムを作るものだが、玉の緒、息の緒といった時は、すでにそれが一つの「ことのは」をなす。そこには日本語の「の」の働きに言及する必要があるが、今は省略する。

4-2) 接辞

上のようなアマルガムは、いわゆる接頭辞や接尾辞の働きにも似ている。接頭辞や接尾辞は一音のものが多い。中には「あひ集(つど)ふ」とか「かき立つ」とかと二音のものもあるが、二音のものはそれ自体として単語として自立しており、「あひ」は「会ふ」、「かき」は「掻く」とひとしい。

そこで単語として成り立たない一音のものの方がより純粋なものといえよう。先の「ね」「ほ」「を」も一音のことばであった。そしてこの中では「ね」だけが自立しているが、それでも自立した時はroofの場合に限られ、山を現代語で「ね」ということはない。

「ほ」は全く単独では用いられない。

すると一音の単語が典型的なアマルガム語だということになるが、その例としては次のようなものがあげられる。

さみだれ さ夜 さ苗 さつき

第一の語は今日いう梅雨である。それを「さみだれ」というのは、この雨によって心が乱れるからで、その「みだれ」に「さ」がついたものである。

この「さ」は勢が激しいこと、そのことをもって恐れ尊ぶ気持を示し、恐れ尊ぶ物体に冠した。上の岩根、岩ほの類とひとしいことがわかる。

「さ夜」は夜という神聖な時間を示し、「さ苗」も豊饒をもたらすべき大事な苗であり、「さつき」=五月は神聖な月であった。ヨーロッパの may とひとしい。

また、「ゆ」も神聖さを示す接辞で、

ゆ槻 (つき) ゆ笹 (ざさ) ゆ庭

などがある。槻 (けやき) は直立する姿の美しい巨木である。「ささ」(小さい竹) はよく狂女の持物として能に登場するように、尊いものであった。柿本人麻呂が山道で小竹 (ささ) の揺ぎを聞いているのも、畏怖体験であった。「ゆ庭」は祭場のことである。

一方接尾辞も多い。

子ら 背な 島み

といった単語がある。これらも「ら」「な」「み」を除くとニュートラルな存在になるが、それらをつけることによって、情感をもつに到る。つまり上の岩根などと同じ物体指示と性格判断がある。アマルガムの「ことのは」である。

「ら」は親愛の情を示す。「な」は信頼の情を加える。「み」は湾曲をいうから「島、その曲線を描くもの」といった表現である。

以上のようにみると、ここにも「ことのは」を「こと」とするアマルガムがあり、この場合の「ことのは」は「もの」をのみ指示するのではないことになる。

いや、逆の表現が正しいのであり、最小の叙述「こと」が、「ことのは」の中に見られる例がこれらだというべきだろう。

4-3) 一音節語

ここで接辞とよばれる一音節語の素性にふれておくべきであろう。

今日のわれわれが「さ」「ゆ」「ら」などといっても、意味をとりにくい。反対にわれわれが日常用いている単語は二音節ないしそれ以上が圧倒的に多い。一音節語を考えると、古語の「う」(得) ていどがすぐ思い浮かぶものであろう。しかもそれも現代語ではもう死んでいる。

すると一音節語は非常に古く、わずかに化石のように残るものが根のごときものだけといえよう。

上の「さ」は「す早い」「凄 (すさま) じい」「進 (すす) む」といった「す」「すさ」「すす」の基の語で、二音節以上になって用いられつづけたものと思われる。

「ゆ」は「ゆゆし」「ゆむ」(忌む) となった、恐れて憚る気持を示す語として多音節化して残存した。

「ら」は「いろ」(色)「いらつめ」(女郎)の「いら」、

「いろ」の元のものである。「いらつめ」は親愛な女性の敬称。

「いろ」は親しみを感じる気持。とくに男女間のその気持が「色好み」などという「いろ」であるこの気持は華やかなものだから、やがてcolourをいうようになる(ちなみに中国の「色」も男女が重なっ

た姿で、男女の情事が華やかなため「色」が colour をいうようになった)。

「な」は上の根とひとしいと思われる。「背な」は信頼すべき男性だから「妹(いも)な」(妹は女性のこと)とはいよいよもない。

そして「み」は「廻(み)る」という動詞が生き残った。

以上の考察を正しいとすると、一音節語とは太古の「やよいことば」というべきであろう。もう七、八世紀の人といえども一語として使っていなかったのだから、接辞だけの中から独立した語の存在感をかぎとることはなかったと思われる。その点が「あひー」「かきー」と違うところである。

たとえばわれわれは英語の un や dis、com、ex などという単語の部分から意味を感じとることができるが、それに相当する日本語は二音節の「あひ」や「かき」だろう。

英語にしる日本語にしる、これらはそれぞれ単独の意味をなす部分が連ねられて一語をなしているのだから、これは複合したもので、今問題とする接辞とは別のように思われる。

また、英語の上の例などちがって、日本語の接辞はさまざまに情念的であり、一つの抽象概念—否定とか共同とかといった規定の概念とは違うものと考えられる。

4-4) 働き分類の原理

そこで、以上に問題とした「ことばのアマルガム」において、これを結果的に見ると、すでにあげた働きの指示という日本語の性格が、このアマルガムを容易にし、またアマルガムとは、働きの指示を強調するものに他ならないことが明らかになってくる。

もし「ね」が root のみのものなら、岩根、屋根らのことばは存在しない。いくらでも、働きをひとしくさえすれば付いてゆくことにおいて、アマルガム語は増えてゆく。

緒も同じである。緒は長いものなら何でもいいということによって、魂も緒なら、下駄の鼻緒も緒になる。

むしろアマルガムをひきおこす正体は、この働きへの重視だったというべきだろう。そもそも、アマルガム語以外にあげても、

つま=夫、妻

ほ =穂、秀、焰

あら=新、荒、洗(ふ)

うつ=移る、写る、映る、現(うつつ)

のごとくで、「つま」はペアを意味するから夫も妻も「つま」である。husband と wife が同じだといっているのである。稲でも山でも火でも、先端は「ほ」であり、体を洗うことは体を新しくすること、体を荒々しくすることである。「うつ」も移動がすべて「うつし」

でコピーも引越しも、スクリーンの上の映像もみんな同じカテゴリーに属するのである。

しかもそれが現実だという。

この事実、物を指示すべき言語が、個別をこえ、可視の姿を超越し、内包された特性が最大の被指示物と目された、ということである。

もし、このような認め方が不可能だとしたら、岩はつねに岩であり、子はつねに子であったであろう。一方に、働きによって物を分類していくという「働き分類の原理」があり、一方に物理的な「物体分類の原理」があって、この双方を結合したところに、しかもいきなり結合させたところに「ことばのアマルガム」が生じたのだと思われる。

5 まとめ

私は以上において、次の三点を述べた。

1. 「こと」とは「もの」の叙述のことである。
2. 「こと」（叙述）の原型が連合詞に見られる。
3. 「ことば」の中には、その内部で「もの」を「こと」にする、「ことばのアマルガム」とよぶべきものがある。

2と3は「ことのは（ことば）」を「もの」の指示として、「こと」に先立つものと考えた上で、特例的に叙述を示すものであった。

そして連合詞はソシユールを顧みることによっても原型的表現であることがわかり、一方のアマルガムも、言語の古層に属することばによって起こるものだったと思われる。その点でも一般的な「こと」（叙述）の原型となすことができ、興味ぶかい。

また「こと」によって言霊を発動するようになるものが「もの」であり、「ことのは（ことば）」以前の「もの」は漠然とした不可分の存在であった。それが「ことのは（ことば）」によって個別化され、ついで「こと」に戴せられて存在を完全にするものだと思われる。

安易なアニミズムや言霊信仰を口にするのは、こうした言語の構造上正しいことではないと考えるのである。

